

Title	主人公はなぜ殺されたか：ホフマンスタール『騎兵の物語』の謎
Sub Title	
Author	大畑, 純一(Ohata, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集編集委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 (2007.) ,p.77- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00000001-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

主人公はなぜ殺されたか

ホフマンスタール『騎兵の物語』の謎

大 畑 純 一

1. 題名

表題は『騎兵の物語』（1898年）。騎兵すなわち騎馬の兵。主人公アントン・レルヒが物語に初めて登場する時、彼は馬に乗っている。物語から退場する時も彼は馬上の人である。次の瞬間馬から落ちて彼は物語から姿を消す。登場と退場のシーンは次の通り。

曹長アントン・レルヒは馬を降り……¹⁾

……曹長は頭を撃たれ、上半身を自らの馬の首にもたせかけ、それから栗毛と葦毛の間の地面に落ちた²⁾。

Reitergeschichte とはとりあえず Reiter 「馬に乗った人」の物語である。表題だけを読んだ読者が最初にイメージするのは、「騎兵」（例えば翻訳の場合）ではなく、おそらく乗馬に関する何らかの話の予感だろう。タイトル通り主人公レルヒは物語の中で職掌柄とはいえ当然のように馬に乗り、騎行し、そして降りる。物語の中で彼はほとんど馬に乗りっぱなしである。馬を降りる動作で物語に登場したレルヒは、つまりは馬に乗って現れたのであり、直後の戦闘の場面にレルヒは一切出てこないが、馬上の人として戦いに参加したことだろうと想像される。物語の中でレルヒが馬を降りる場面はごくわずか、ほとんど女の家に着た場面のみと断言していいだろう³⁾。次に馬を降りるのは結末で射殺されて落馬する時である。少なくとも物語に記述されているかぎり、この一日の物語の中で馬に乗っていない、地上の人としてのレルヒを読者は女の家でのみ知ることになる。この見慣れないレルヒの姿は馬上の人としての自然で安定したレルヒと違いどこか心もとな

い。ヴァイチという女の家を出た彼は妄想にふけることになるが、女の家シーンそのものが夢想 (Träumerei⁴⁾) の趣を持っているのは、前後の軍事行動との極端な対比もさることながら、ここでレルヒが物語中ただ一度しばらくの間 (あまり長くない時間だと記述からは想像されるが) 馬から降りた地上の人だったということも影響している。

2. 構成

全体は6つの部分に分けることができる。もちろん分け方により4つにも5つにも分けられないことはないから6つというのはあくまで便宜的なものである。

- A 主として報告調の文体で記述されたその日の朝から午前中にかけての戦闘。
- B 正午の鐘とともに中隊がミラノ入市。市中行進、通過。ここに有名な、コンマやコロんでつながれた最長のワンセンテンスの文がある。
- C 市近郊の女の家。午後、旧知の女ヴァイチに会い、これをきっかけにレルヒは欲と金の妄想にふけることになる。
- D 夕。村。荒れ果てた陰惨な村の通行。輝かしいミラノ通過の陰画であるかのような悪夢。
- E 村を出たところにある橋の場面。レルヒは自己の分身 (Doppelgänger) を目にする。新たな戦闘で彼は美しい葦毛の馬を戦利品として手に入れる。
- F 一日の終わり。日が落ちる頃戦利品の馬を放せという上官の命に従わずレルヒ射殺。

C、D、F はほぼ同じ量が割り当てられている。そしてアントン・レルヒを主人公とする短編小説の事実上の開始といえることができるCから文体もそれまでとは一変する。文体の違いは以下のようにまとめられるだろう。

- A 軍隊小説的な戦闘報告。
- B 朗々とした語りによるミラノ通過。輝かしく堂々たる騎兵たちの歩みのように流れていくワンセンテンスの長文。

„...vorbei am Santo Babila, an San Fedele, an San Carlo, am weltberühmten marmorenen Dom, an San Satiro, San Giorgio, San Lorenzo, San Eustorgio; ...“⁴⁵⁾

例えばこうして通り過ぎる教会の名が列挙されることにより読者はともに馬の歩みのリズムに乗って行軍するような思いをする。ミラノ通過の輝かしいイメージは金属的なきらめきを示す語彙が多用されることにもよっている。そこではラッパ (Trompete) が鋼色に (stählern) きらめく (funkelnd) 空に向けて吹き鳴らされ、千の窓がカタカタと鳴り (hinklirrend) 78の胸当て

(Kürasse)、78の抜き身の刃(Klinge)に光がきらめく(zurückblitzt)。これらはことごとく後のDの村と著しい対照をなしている。78騎によるミラノ行軍とレルヒただ一人による村の通過。一定のリズムによる行進と難渋する歩み。輝く金属のイメージの町に対し、虫や鼠、病気の犬が横行する、汚れ荒れ果てた村。同じ通過の物語がここでは明らかに陽と陰の極端な対比をなし、戦果をあげた部隊のいわば凱進行進と比べて、村は一層その悪夢のような非現実性の印象を与えられることになる。

C～F 事実上の短編小説の始まりを思わせる文体。Aにおいて名のみ言及された(Bに個人名は一切出てこない)レルヒがあらためて主人公のお披露目のように語り手によって呼び出される。「曹長アントン・レルヒは知り合いの女の顔を見たように思った、」⁶⁾。以下C～Fでは語り手はほぼレルヒに寄り添う形で彼の心理内容にまで言及するようになる。これはA、Bには全くなかったことで、A、Bの、午前中の中隊の戦果を述べる部分では中隊の一員でしかなかったレルヒがCでふとしたことから単独行動をとることにより主人公として前面に出てくるという構成である。A、Bの軍隊小説的な部分を序として、レルヒの欲望と転落の物語が語られるわけだが、結末の数は再び冒頭の軍隊小説の文体に戻る。「しかし敵は新たな攻撃をしかけてはこず、しばらくの後巡察部隊は妨げられることなく、南方の自軍の前哨線に到着した」⁷⁾。いわば粋小説の形である。最後の粋はきわめて短い、何事もなかったかのように軍隊の動きが淡々と述べられることによって、レルヒの死の物語は長い一場の悪夢であるかのように消し去られる。これが一日の物語であったこと、主人公レルヒが登場するのはほぼ午後になってからのことで、夕方にはもう射殺されていることに、読者は最後にあらためて気づかされる。レルヒの物語の異様さは、軍隊の日常から消去され、異世界の輝きを帯びる。

3. 馬の力

『騎兵の物語』はまた「馬の物語」でもある。常に馬に乗り馬を操る騎兵は、知らぬ間に逆に馬に操られる存在でもある。主人公レルヒの行動、遭遇する事件は、馬の合図により、馬の指示により引き起こされるかにみえる。ミラノを通過したレルヒがCで女の家立ち寄りきかけは、ある家の窓に旧知の女の顔を見たことだが、「同時に彼の馬の歩みが硬直したようになり、前脚の蹄鉄に路上の石ころがくいこんだかに思えた」⁸⁾からでもあるのだ。レルヒは馬を降り蹄鉄を調べる。馬を降りるという物語中ほとんど唯一の行為は馬のせいである。一方女の家を立ち去る指示も馬から与えられる。レルヒが女の名を呼び、一週間後にまた来ると言った時、「レルヒは、馬が黙って轡を引き他の馬たちに向かって高くいなないて、出立を促されるように感じた」⁹⁾のである。

Dで村の通りをギャロップで通り抜けようとしたレルヒはすぐに「堅い舗石を足元に感じその上何かぬるぬるとした脂が撒かれており、馬の速度を落とさざるをえなかった」¹⁰⁾。村の通過が彼に

とって「測り知れぬ時間を費やした」¹¹⁾かに思えたのは馬のせいである。村のさまざまな奇怪な生き物の中で特に印象的な、顔の見えない女の出現も馬の行動の結果である。馬の指図で突然女が道の上に現れたとさえ思える。

彼の馬の歩みは重くなり、まるで鉛でできているかのように後脚をやっと引きずっていった。彼が振り向いて後脚の蹄鉄を見ようと身をかがめた時、一軒の家から引きずるような足音が聞こえ、身を起こすと彼の馬のすぐ前を一人の女が歩いていた¹²⁾。

女がどこから現れたのかレルヒは見していない。馬が邪魔したからである。女が姿を消すのは明確に馬のせいと言うことはできないが、血を流して喧嘩する鼠に気を取られた馬が立ち止まり地面をみつめ、再び馬を進めた時には女はある家の戸口にすでに消えていた、とあるから馬が何らかの作用を及ぼしていると考えられることも可能である。

ようやく村を出てEで不吉なドッベルゲンガーをレルヒが目にする際も馬は重要な役割をはたす。ドッベルゲンガーに、レルヒより先に気づくのはおそらく馬である。今度は馬は音を出す。

彼の馬の胸から重苦しい呻るような息が出てきたが、まったく耳慣れないその物音をすぐには理解できず、音の源を上方や横にさがしてついに石の橋の向こう側に、自らの連隊の騎兵が、石の橋から自分の位置とほぼ等距離のところをこちらに向かってくるのに気づいた¹³⁾。

その騎兵が自らのドッベルゲンガーであるらしいとレルヒが確認するのも、主として乗っている馬によってである。自分と同じ曹長だと分かったものの、同一の軍服のせいもあるだろう、最終的な判断は馬の特徴によってなされる。すなわち「白い前脚の栗毛」「全連隊中、この瞬間乗っていたこの馬をのぞいて他にこのような馬はいないことを彼は知っていた」¹⁴⁾のである。

そしてもちろんレルヒの死はもう一頭の馬が原因だ。射殺されて栗毛と葦毛の間の地面にくずおれることによってレルヒは永遠に馬を降りる。

4. 異界

Cの女の家のヴェイチとDの村の顔の見えない女との間には、村の女がわずかしか登場しないにもかかわらず、ある繋がりや想像させるものがある。Dの村はBのミラノ通過と、行進という点で、先に見たように陰と陽をなしているが、他方CとDも、女という一点でまた別の対照をなしていると見る事が出来る。

ヴェイチは「豊満」な女であり、レルヒは彼女の話す際の「気取った仕草、部屋着、部屋の調度」¹⁵⁾などに圧倒される思いをしている。一方村の女は「半分服を引っ掛けた姿で、その花模様の絹製のスカートは汚れ裂けて水たまりにひたっており、裸の足はきたないスリッパにつっこまれていた」¹⁶⁾というみじめな様子である。正反対で互いに何の繋がりもなさそうな二人の女を結びつけるものは「うなじ」Nacken と動物である。

ヴェイチ： 彼は女の櫛の上を歩いている大きな蠅を目で追いながら、この蠅を追い払う手をどのように白い、暖かく冷たいうなじに置こうか、ということ以外何も考えていなかった¹⁷⁾。

村の女： 彼女は馬のすぐ前を歩いていたので、馬の鼻息が、古い麦わら帽の下、あらわなうなじに垂れる、脂でてかてか光った、髪を束ねる紐を揺らすほどだった¹⁸⁾。

女の正面と背後からという違いはあるが、至近距離からレルヒは女のうなじを見ている。綺麗なうなじと汚いうなじと。ここには二人の女の繋がりを推測させるいくつかの要素がある。二人の女は同一人物という極論はともかく、良い生活をしている女とその零落した姿としての村の女、それを幻視するレルヒという解釈は、女の顔が見えないだけに、テキストの許容範囲であると考えられる。絹製、花模様の服という言葉はそれがもともとは上等の服だったということを暗示している。村の他の幽鬼のような、影の薄い人間たちにはもちろんこういう描写はない。ヴェイチと別れて間もないレルヒの目に映った、ヴェイチの陰画としての女。そもそも村の通過全体がこの世のものではない雰囲気をもたえているが、女の登場する場面は、短いだけにかえって読者にかなり強い幻覚的な眩暈の思いを誘発する。村ははっきり異世界、異界といってもいいのではないか。村の女はいわばヴェイチのドッペルゲンガーとも見える。かつては綺麗だったうなじ、かつては綺麗だったドレス、束ね紐。

異界との接触を促すのはどうやら動物の役割である。既述のように人間の、レルヒの行動はことごとくと言ってもいいほど馬の合図によっていた。騎兵であるから馬が異界との往還を指図する主役であるが、他にもこの物語にはさまざまな動物が手下のごとくそれぞれの役をはたす。ヴェイチの家で、いかにもこの家にそぐわない蠅がまず前兆として登場している。このかすかな前兆は、続く村の情景で一気に動物の跳梁として拡大する。計六頭の犬、牡牛、ムカデ、ワラジムシ、そしてヴェイチの蠅に対し、村の女の足元には鼠。村の女が姿を消すきっかけになった、馬の足を止めた二匹の喧嘩して血を流す鼠である。

こうしてレルヒは、まずは自分の乗っている馬によって、異界とは縁のなさそうなヴェイチの家でも蠅が後の村からの使者であるかのように一瞬姿を現わし、そして村に入り込んでからはさまざま

まな動物たちによって、必然的に別の世界へと誘導されていく。村を出た橋の上で彼が自らのドッベルゲンガーを目にするのは、それまでのさまざまな誘導する力のとどめの一撃である。

5. 言葉・声

物語の中で括弧でくくられた発言は二つしかない。Cの女の家でレルヒが「ヴーイチ (Vuic)」と十年来口にしなかった名を呼び「一週間後にわれわれは進駐し、ここをおれの宿にする」¹⁹⁾と云うところ。もう一箇所はFでのレルヒ射殺の前段階、ロフラーノ男爵の命令「馬を放せ！」その後「一」「二」と数が数えられ、レルヒの意識に去来する思い、怒りが記述された後決定的な「三」²⁰⁾が来る。登場人物の声が実際に読者の耳にひびくのはこの二箇所だけだ²¹⁾。この二箇所の発言は、ともに軍隊の職務としての発言、兵の言葉である。レルヒとロフラーノの個性、人間としての思いを想像させる要素はあまりなく（レルヒの「ここを宿にする」という発言に女への欲望を読者は読み取るが、発言自体は軍人としての職務の言葉にすぎない）、逆に無個性な、軍人としての二人という印象を強める働きをしている。

無口な人間たちに対し動物たちの声は物語のあちこちで聞き取れる。先に見たように、悲鳴をあげる鼠、要所要所でいななき声を立てる馬、Dでの六匹の犬たちの吠え声は記述されていないが、「苦痛と不安」をたたえた目をし、中の一匹は「曹長に向かって頭を上げ彼をじっと見つめ」²²⁾る。声をあげ、あるいは雄弁な目の表情で動物たちは暗躍する。ムカデたちすらレルヒの目にその存在を誇示し、彼らは互いに無関係ながら協力し合ってレルヒを死へと導いていく。

二人の人間が口にしたさして価値のあるとも思えぬ発言はしかし発言されたことで思わぬ効力を発揮する。ロフラーノの「一、二、三」はレルヒの決定的な死をもたらすのだから言うまでもないとして、レルヒの「一週間後……宿にする」という言葉は以下のように補足される。「発言された言葉は多大な効力を発揮した」²³⁾。そしてここからレルヒの女、金銭への欲望が一気に全開し、性欲の奇怪な妄想となって肥大する。そもそもヴーイチという女の名が不意に思い浮かぶ (einfallen) ことが、十年ほど前のウィーンでの女の思い出を呼びさましたのだった。名前を思い出せない人間はさしたる影響を及ぼさない。名前を思い出したことを契機に女は生々しい存在となり、ふと口をついて出た言葉もまたレルヒを結末へと導く。

6. 主従関係

隊長のロフラーノ男爵と曹長アントン・レルヒは対照的な存在として描かれている。最後の場面だけでもロフラーノを形容するには次のような言葉が使われる。「眠たげな (schläfrig) 青い眼」「ヴェールのかかったような (verschleiert) まなざし」。レルヒを射殺する時も、「投げやりな

(nachlässig) ほとんど気取った (geziert) 仕草で腕を上げた²⁴⁾。

一方レルヒのまなざしの中には「何か押さえつけられたもの〔Gedrücktes〕」「卑屈なもの (Hündisches)」がちらついては消え、彼の心には「獣めいた怒り (ein bestialischer Zorn)」²⁵⁾が湧き上がる。貴族的で物憂げな仕草と卑しさの対比は、レルヒのいささか唐突な射殺を一種の階級的な視点から解釈することも不可能ではないと思わせるものさえある。しかしこの上官と部下の間にはもう少し微妙な関係が認められるのではないだろうか。レルヒのまなざしはさらに「長年の主従関係 (Dienstverhältnis) から来る一種の卑屈な信頼といったものを表していたのかもしれない」²⁶⁾と説明されている。しかも彼の上官に対する怒りは、ただ「長年の密接な (eng) 共同生活 (Zusammenleben) からのみ生じうるような」怒りであり、それは「彼自身にも完全に未知だった心の底から立ちのぼってきた」²⁷⁾怒りであり、その怒りの現れ方は「神秘的 (auf geheimnisvolle Weise)」とされている。ここに軍隊特有のある種の同性愛的志向を読み取るのは行き過ぎとしても、レルヒの怒りには単に階級的な憎悪だけでなく、彼自身にも意識されない愛憎の入り混じった感情を認めることもできるのではないだろうか。それに続く箇所では隊長の心理を説明する際には、「隊長の中にもなにか同じようなもの (etwas Ähnliches) が生じたのかどうか……」²⁸⁾、結局は「疑問のままである」とされているが、この ähnlich という語には、感情を表に出さないロフラーノの側にも同様の腐れ縁めいた愛憎があったのかもしれないという暗示が込められているのではないか。「上唇をさげすむように引き上げながら」引き金を引くロフラーノの表情の描写にも何かを読み取りたくなるが、そこまで同性愛的に解釈するのはいささか行き過ぎかもしれない。ただこの主従関係には、互いに正反対の人間であるにもかかわらず、互いが互いの鏡のようなどころがあり、これまた一種のドッペルゲンガーであると言いたくるところがある。レルヒが橋上で出会ったドッペルゲンガーの仕草をそのまま模倣するかのようにはロフラーノは腕を上げてレルヒを撃つのだ。

7. 死の静けさ

totenstill という言葉が二箇所使われている。toten- に過度に「死」の意味を読み取る必要はなく、単に「静まりかえった」という形容語にすぎないと一応は言えようが、ここはあえて「死の静けさ」と取りたい。Dの村に最初に足を踏み入れた時、村は「死の静けさ」²⁹⁾と定義されている。二度目にこの語が現れるのが、最後のFでロフラーノが「馬を放せ！」と命じたあとである。「中隊は死の静けさに静まりかえった」³⁰⁾。レルヒの死の直前、この中隊が集合している場所に突然異界の死の村の静けさが染み渡るかのように。

注

テキストは Hugo von Hofmannsthal Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden, Erzählungen Erfundene Gespräche und Briefe Reisen 1979 を使用した。以下の引用はすべてここからである。

- 1) S. 121.
- 2) S. 131.
- 3) 冒頭で馬から降りた、物語の展開の上でさして重要でない場面において、レルヒはいまだ主人公であるかどうか読者には不明なままである。ここでのレルヒは、ロフラーノ、トラウトゾーン、ヴォトルベク、ホル、ハインドルといった、名が挙げられている軍人の一人にすぎない。ただ注意深い読者は「曹長アントン・レルヒ」だけはここで唯一フルネームで呼ばれていることに何かの予感をもつかもしれない。
- 4) S. 125.
- 5) S. 122f.
- 6) S. 123.
- 7) S. 131.
- 8) S. 123.
- 9) S. 124.
- 10) S. 126.
- 11) S. 128.
- 12) S. 126.
- 13) S. 128.
- 14) S. 128.
- 15) S. 124.
- 16) S. 126.
- 17) S. 124.
- 18) S. 126.
- 19) S. 124.
- 20) S. 131.
- 21) ロフラーノに戦果を報告するレルヒ、ヴァーイチが「話しかける気取った仕草」という記述から、少なくともこれらの場面でレルヒとヴァーイチは何かを口にしてはいるが、それは一切読者には知らされない。ヴァーイチは読者にとってはただ黙って微笑む女にすぎない。
- 22) S. 127.
- 23) S. 124.
- 24) S. 131.
- 25) S. 131.
- 26) S. 131.
- 27) S. 131.
- 28) S. 131.
- 29) S. 126.
- 30) S. 130.

参考文献

Martin Stern : Die verschwiegene Hälfte von Hofmannsthals «Reiter-geschichte». In : Basler Hofmannsthal- Beiträge (Königshausen & Neumann) 1991.

Richard Alewyn : Nachwort von „Das Märchen der 672. Nacht Reitergeschichte Das Erlebnis des Marschalls von Bassompierre.“ (Fischer Taschenbuch Verlag) 1971.